

# 「底が突き抜けた」時代の歩き方 533

現実がますます「希薄」になって、虚構が濃密になっていく時代をどう生きるか

第1回ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)の初代王者に輝いた日本代表チームに目を見張ったのは、優勝したことでも、強さでも、運に恵まれたことでもなく、選手同士の関係の濃密さであった。とりわけ、クールとか一匹オオカミとか、他を寄せつけない研ぎ澄まされたジャパン・サムライと、メディアによってさまざまに形容されてきたイチローが熱っぽくナインに檄を飛ばしたり、優勝時のシャンパン掛け映像ではしゃいでいる彼のなんとも嬉しそうな姿に、その濃密さは際立っていた。後にこの優勝が人々の話題に上るときには、イチローを筆頭にナインたちの熱っぽさも一緒に想い起こされるにちがいない。

『週刊文春』(06.3.16)には、『臨時増刊 BUSINESS』(3月6日発売)で、共に組織改革をトップダウンで行ってきた経営者である、キャノンの御手洗富士夫社長(70)と伊藤忠商事の丹羽宇一郎会長(67)が対談を行っていることが、記事として取り上げられている。二人に対する経済誌記者の評価は、次のとおりである。

「丹羽会長は社長時代の1999年、商社業界では最大規模の3950億円の特別損失を計上しました。ところが翌年、過去最高益をたたき出した。このV字回復は『丹羽マジック』と評されたほど。その思い切りのよさは、大きな注目を集めました。」

一方の御手洗社長は、95年に社長就任後、連結決算の導入、キャッシュフロー重視の経営に移行して、事業部制の改革に乗り出しました。終身雇用の維持を唱えているので温情主義かと思いきや、実力主義や不採算事業の撤退などを断行する合理主義者。生産方式を変えるなどシナジー効果もあって、現在、6期連続増収増益です。

5月に経団連会長就任が内定していますから、その前に親しい丹羽会長との対談で言うべきことは言っておきたい、という心境もあったのでは？」

対談では、「改革力」がテーマで、「改革の要諦は明確な目標設定にある」ことを踏まえた上で、『いかに「人の心」を変えていくか』が話し合われ、「対話&対話&対話のほか、人を動かす方法はありません」(丹羽氏)、「要するに回数です。同じことを言い続けて、ようやく社員に浸透するんです」(御手洗氏)といった、それぞれの経験が開陳される。ここでなにが強調されているかといえは、もちろん、「対話」の必要性であり、「同じことを言い続け」ることの重要性であるが、「対話」そのものが成立する関係性、あるいは、「社員に浸透する」ような言葉の熱の帯び方や反復の粘り強さが前提とされている。つまり、関係の濃密さが不可欠であることが当然のように踏まえられている。「人の心」というものは濃密な関係のなかでしか揺り動かされないということであり、

企業組織のなかでも働くものの真のヤル気を引き出すような関係が確立されなければ、業績そのものも伸びないということだ。

ＪＲ西脱線事件に言及した際に、ＪＲ西という企業組織に対比させるかたちでダイキンを通信で取り上げたが、井上社長もまた、「グループ経営理念」に「一人ひとりの成長の総和がグループ発展の基盤」という言葉を盛り込み、「人を基軸に置く経営」を推進させることによって、リストラなき「静かな大革命」を成功させていったと評価されている。「走りながら考え修正してい」く組織をめざして、「それが社員の納得性につながるかどうか」、「結局、成長の機会をどれだけ提供できるか」、「貢献する人にはより多くのチャンスを与えることで報いる」、「面白い、この仕事がしたいというところへどう誘うか」、「会社と個人が選択し合う関係でありたい」、「遊び心とか、皆で盛り上がるというのは納得性につながる」、「時代対応の経営とは何か」というコンセプトをちりばめながら、肩書による上下関係を流動化させるなかで、濃密な人間関係づくりを根底に置いている。

それは、「他人との積極的なかわりを通じて、『自分はこのままでいいのか』と自問し、成長への意欲を高めてもらうこと」を目的とする５泊６日の「鳥取合宿」の新人研修に顕著に見出される。『日経ビジネス』（０５．６．２７）の記事には、こう記されている。

《新人は７～８人ずつのグループに分かれ、そこには先輩社員がリーダーとして加わる。時にはテーマを決め、時には議題を定めずにグループディスカッションを繰り返す。

合宿の後半では「どうすれば彼（彼女）は成長できると思うか」というリーダーの問いかけに、当の本人を含めて議論を戦わす。辛辣な意見が出ることもあるし、自覚していなかった長所を指摘されることもある。感情が高ぶり、ポロポロ泣き出す新人もいる。以前は取っ組み合いの喧嘩になることもあったという。》

洗脳教育にみえなくもないが、「企業にいる限り、人とのかわり合いはずっと続く。それなら前向きにかかわっていった方がいい。研修でそのコツをつかんでほしい」（十河取締役常務執行役員）と把握されており、《研修には井上や十河も必ず顔を見せ、新入社員とざっくばらんに話をする。最後の夜はキャンプファイアー。グループディスカッションで泣き出した新人が、今度は５日目の達成感から涙を流し、翌日は晴れ晴れとした表情で帰っていく。》記事は、《旧来の「家族主義」とは異なり、ダイキンの経営理念や風土に共感して働く人材にチャンスを与え、同時にロイヤルティと帰属意識の向上を求め」ていき、《現場にリーダーが積極的に入り込み、全員で侃々諤々の議論をしたうえで、最後はリーダーが意思決定する》「衆議独裁」の方法を習得させるための訓練であり、《誰もが情報を共有し、共感を得てからの独裁だから納得性も高まる》と説明する。

濃密な人間関係づくりは新人研修だけで完結するものではなく、当然仕事のなかで活かされていくものでなければならない。入社２年目の女性社員が、「うちの会社は誰と

でも言いたいことを言い合える。新人研修での体験が役立っているのかもしれない」と話すように、「新人研修での体験」は、《役職や年齢に関係なく、最もふさわしく、最も強い情熱を持つ人間がコアマン（中心人物）となり、それを周りが支える柔構造の組織運営》として、「コアマンとサポーター」があり、《特定の人物が常にリーダーになるのではなく、思いがある者にチャンスが与えられ、その中から「日替わりヒーロー」が生まれる》ようになり、「みんながお祭り感覚で、企業をどんどん広げてい」き、「やる気がある人間に仕事を任せる」ために、上司に「これ、やらしてください」で通ってしまいうスタイルに結びついているという。

大手企業のトップが社員との「対話」を心掛け、「社員に浸透する」言葉を何度も繰り返し、ダイキンにみられるような「濃密な人間関係づくり」を企業組織の目標に掲げるのも、いうまでもなく「希薄」な時代の空気を吸って生きてきた若者たちが入社しても、頓挫することを見越しているからだ。企業人間を育成する以前に、人間そのものを鍛え直さなければ使い物にならないことを骨身に沁みているが故に、「人を基軸に置く経営」にまで踏み込まざるをえなくなっているし、働く以上は一人ひとりが納得しながら楽しく、面白く働くことができるものでなければ、企業のなかで最大限の力を発揮することができないということにも気づくようになっていったのである。社会が「希薄」な空気に満ち満ちているなら、企業はそれに背を向けて「濃密な人間関係づくり」を志向しなければ、存続することすらできなくなっているという危機感が逆に透けて見えてくる。

リリー・フランキーの『東京タワー』の私小説を貫いているものも、オカンとボクの濃密な関係である。オカンはボクに対してだけでなく、誰に対してもご飯を食べて帰きなさいと勧めるような人であり、東京で仕事をするボクと同居することになっても、その押しつけがましさのない親身心は全く変わらなかった。そんな人間に東京で出会ったことのないボクの友だちの誰もが、ボク以上にオカンになつくようになって、オカンの手料理に日参する者まで現れる始末だった。そんな連中にもオカンのスタンスは変わらず、我が子のボクに接するように誰にも接した。そう、オカンはボクのお母さんだけでなく、みんなのお母さんになってしまうような分け隔てのなさを振る舞って一生を生きただのである。小説はそんなオカンへのレクイエムとして描かれていたが、接する誰に対しても濃密に対応するオカンの下で育てられ、40歳近くまで同居したことがおそらく原因となって、ボクは結婚もせずにオカンに孫の顔を見せてあげることもできなかったことを遠回しに浮かび上がらせている。

『東京タワー』のオカンのような人々が集まっていたのが、映画『ALWAYS』の舞台となった昭和33年である。モノがない貧しさのなかで人々はお互いに手を差し伸べ合い、自然に人間関係の濃密さが醸成されていった。敗戦によってしいられた平等な貧困がたちづくる茫漠とした共同体のなかで人々は各々の生活的な苦境から脱するために、ひたむきな頑張りを発揮していった。この世代の人々は戦時中も戦争に勝つために、極度

のモノ不足のなかでひたむきな頑張りを発揮してきた苦い記憶を脳裡に焼き付けていた。だが国家の必勝に回収されていく戦時中のひたむきな頑張りとは異なって、敗戦の記憶を引きずった戦後のひたむきな頑張りにはもはや国家の影はなく、あくまでも自分たちの生活の向上をめざすためのものであった。お互いにモノを持っていないという平等な貧困の意識が、その貧困から脱するためのひたむきな頑張りの共同性を醸し出すなかで、人々がモノ（に投影されるやっかみなどの意識）に邪魔されない人間関係を濃密にしていくのはある意味で必然であった。

しかしながら、昭和33年は映画でも描かれていたように、主人公の三文小説家が縁もゆかりもない他人の子供を預かるという人間関係の濃密さが示される一方で、もう一人の主人公である自動車整備工場の経営者の家に、町内の先頭を切ってテレビや電気冷蔵庫が入るといふ、モノの豊かさにいよいよ突入していく時代であった。つまり、人間関係の濃密さとモノが充足されていく豊かさとが共存しえた最後の幸運な時代であった。東京タワーが完成した昭和33年を映画が舞台設定に選んだとき、当然この共存が破れて人間関係の濃密さがモノの豊かさに取って代わっていく後世を見据えて、昭和33年の幸運な共存を思い起こせ、と主張したかったのであろうか。だがその幸運な共存とは、濃密な人間関係にとってはモノの豊かさによって駆逐され、断絶させられていく最後の花火のようなものでしかなかった筈だ。本当は幸運な共存なんかではなく、主役交代の舞台としての昭和33年として把握される必要があった。

宮台真司はとどまるところを知らない現実の「希薄」さを、「援助交際ブームの後に訪れた女子高生たちの『希薄』」（『週刊朝日』06・3・10）を通して、次のように簡潔に要約してみせる。《援助交際は、96年をピークに下火になり、若い人たちの性に関するスタンス、社会やコミュニケーションに対するかかわり方が変わっていきました。その延長線上に、たとえばいまの「萌え」がある》と説明する。90年代初頭に始まった当初の援交は、《両親が不仲だったり、付き合っている彼氏との間で問題があったり、さまざまな理由で抑鬱感情を抱えている》「普通の娘」が主流で、《いわゆる古いタイプの「不良娘」》ではなかった。彼女たちにとって援交とは、抑鬱感情の「突破口」であったため、噴き上がったのである。《ところが援交がブームになった結果、「みんながやっているから私も」「みんなの遊びについていくには私も稼がないと」という「ノリに遅れない」ための振る舞いになってい》く。

自分の抑鬱感情に本人たちが気付くようになってから援交が下火になり、《「常習援交をやるような人間はイタイ奴＝イケてない奴だ」という空気が急速に広がり、援交が格好悪くなっ》ていくが、援交そのものがなくなったわけではない。「常習援交」の代わりに「臨時援交」が増えたただけのことで、《臨時援交とは、たとえば携帯料金が払えないとき、消費者金融より援交のほうが親に迷惑かけないし、取り立てにもあわないからリスクが低い、という発想》に立っており、《援交をする娘としない娘をはっきり分けることができなくな》っていく。《同時に、警察の摘発強化によって都市近郊で店舗風

俗がデリヘル（デリバリーヘルス＝派遣風俗）化した結果、顔出しがイヤで風俗で働けなかった娘たちが、どんどん風俗で働くようになりました。かくして、ナンパ - コンパ - 紹介 - 出会い系 - テレクラ - 援交の境目はぼやけ、素人と玄人の区別が曖昧になってい

く。《感覚的には、首都圏の20代女性の3分の1が援交や風俗体験入店の経験をしてい」とみる。《こうしてこの10年、女の子たちは自分自身の痛々しさに向き合うのをやめるために「希薄」な存在になりました。男のほうもそれがわかっているから、男女の付き合いは薄くなる。相手の携帯にほかの男からメールが入っていても驚かない。薄い現実より虚構のほうはまだ濃密だという感覚が蔓延し、ナンパ系とオタク系の階級落差が消えました。

いま捕まることもヘッチャラで犯罪に手を染める若者が増えています。昨今の問題は道徳ではなく、希薄さなんです。》

モノにはまだ執着しつつけるが、人間関係にはもはや執着しなくなったことがここで語られている。当初、自らの抑鬱感情の処理の仕方として娘たちは援交へと走っていったが、それは、したくて援交をしているわけではないという段階であった。やがて彼女たちは援交を通じて二つのことを学んでいった、一つは援交が抑鬱感情の「突破口」にはならず、更に新たな抑鬱性を増す原因になっているということであり、もう一つは援交はお金になるということであった。援交によって抑鬱性が解消されないどころか、逆に増していくとなれば、援交を「突破口」としてきた「常習援交」が下火になるのは当然であった。しかし、援交そのものがなくならなかったのは、お金になるという現実的な側面が援交にはくっついていたのである。かくして「常習援交」は下火になったが、お金に困ったときにだけ活用する「臨時援交」は増えていった。

そうすると、彼女たちがさまざまな理由で抱え込んできた抑鬱性のほうはどうなったのか。援交が「突破口」にはなりえないことに気づいたとき、彼女たちはどんな別の「突破口」を見出すことになったのか。おそらく彼女たちは自分の外にもはやどんな「突破口」をも見出しえないことに気づいた筈である。では抑鬱性をどうすればよいのか。抑鬱性を感じないようにすればよかったのだ。両親が不仲だからといって、そのことで娘である自分が抑鬱性を感じる必要性は全くなかった。そのためには、両親の不仲と自分とを切り離せばよかった。彼氏との間で起こる抑鬱性についても全く同じことであった。彼氏との関係に踏み込もうとするから抑鬱性が生じるのであって、踏み込まなければ抑鬱性が生じることもなかった。もちろん、彼女が両親の不仲から自分を切り離したり、彼氏との関係に踏み込まないことで抑鬱性を回避しようとすることは、自分から自分を切り離したり、自分のなかに踏み込まないようにすることであった。

もう一つ、「常習援交」から「臨時援交」への移行によって、援交そのものが新たに惹き起こす抑鬱性についてはどのように対処されていったのか。「臨時援交」もまた、紛れもなく援交である以上、なんらかの抑鬱性を生じさせることはいうまでもないが、

彼女たちはお金がないことの抑鬱性と、「臨時援交」による抑鬱性のどちらが大きいのか、を天秤にかけていたにちがいない。前者の抑鬱性のほうが小さければ「臨時援交」はしなかっただろうし、逆に大きければ「臨時援交」をやるといって、ただそれだけの問題であつたと思われる。援交が金稼ぎにしかすぎない以上、金稼ぎのリスクを上回ってまで「臨時援交」をする必要性はなくなったのだ。家族や友人や彼氏との関係でどうしても生じてくる「抑鬱性を感じる自分」に傷つくことに耐えられなくなって、彼女たちはどんどん自分を切り捨てて自分を縮小していくことになった。

関係に悩むことを回避するために関係そのものを回避するようになれば、現実はずっと「希薄」になっていくし、現実が「希薄」になれば関係も「希薄」になって、セックスだけでなく犯罪自体の敷居もどんどん低くなっていく。現実のなかでのあらゆる出来事の「敷居」が低くなっていくから、《昨今問題は道徳ではなく、希薄さなんです》と、宮台真司は指摘するのだ。だが人間は現実の「希薄さ」のなかで生きられるものなのか。空気が薄くなることに耐えられるものなのか。おそらく耐えられないだろうから、現実を濃密にするために立ち上がるよりも、いまそこにある虚構に濃密さを求めようとするのだ。そこで起こってくるのが、希薄な現実よりも濃密な虚構のほうが手応えがあるという事態であつた。《相手の携帯にほかの男からメールが入っていても驚かない》ような男女の付き合いに手応えがある筈もなく、ワクワクする興奮がやってくることもありえなかった。

人間が新たな面白さを追い求める存在であることは、昔も今も変わりはない。ただ現実があまりにも希薄になってしまったために、そのなかで面白さを追い求めなくなった。代わりに濃密な虚構のなかで追い求めるようになった。そのことが大きな変化であり、宮台真司は『『まったく』生きる若者たち』（『Voice』06・3）で、希薄な現実のなかで手応えのなさや、「実りのなさ」という言葉に置き換えて、今日の状況を次のように説明する。国民的目標だったモノの豊かさが達成されたポストモダン（近代成熟期）段階に入ると、幸福感も多様化し、《消費動機も犯罪動機も宗教動機も不透明化》するなかで、一色に覆われた「総中流意識」はモダン（近代過渡期）段階でのコミュニケーションにおいて鮮明であつたブルーカラーとホワイトカラーの階層所属を無化し、「ナンパ系がえらく、オタク系がしょぼい」という、《オタクが肩身の狭い思いをするコミュニケーションスキル専制主義》による、《階級落差が支配する時代が続いた》。

《こうして「俺はブルーカラーだ」ではなく、「俺はモテない男だ」が問題になる時代になった。それはいまも一部で続くが、今日の若い世代を理解するには、もう一つのエポックを知る必要がある。

すなわち女子高生の援交ブームがピークを過ぎた1997年ごろ、コギャルがギャル口化した時期に、ナンパ系がえらくてオタク系がしょぼいという階級落差が急速に消え、数多あるトライブ（種族）の一つとして横並びになったのだ。現実の性愛に乗り出しても、さして実りが無いということが、広く気づかれるようになったのだろう。

当時のエピソードがある。私のゼミに所属する院生の大半が、ギャルゲー（ギャルゲーム＝魅力的女性が登場するのをウリにするコンピュータゲーム）に熱中していた。私が「現実の女とつきあえないからってゲームばかりやるな」と嘆いたら、院生らが「そりゃ違う」と反論したのだ。「現実はいりかたが薄いけど、ゲームの世界は濃密で、女の子も人間的。喜怒哀楽に満ちている。僕らの感覚では、『現実の女の子が濃密な体験を与えてくれるなら現実にも乗り出してもいい』のであって、『乗り出せない』んじゃない」と。

同じころ、私は関西テレビでスケボー少年を取材するドキュメンタリーに関わっていた。夜明けから何時間も練習する彼らの周りには、彼らに憧れるギャルリーの女の子たちが多数ついていた。「練習もいいけど女の子と遊んだほうが楽しくない？」と尋ねると、「そうしてみたけどやっぱり滑っているほうが楽しい」と彼らは答えた。そんなふうに「自分の世界」をもつ男子だから女子が憧れ、だからこそ「自分の世界」から出てこない男子との恋愛は実現しないという「不幸な悪循環」があった。

その後、1990年代末から酒鬼薔薇事件を皮切りに、動機不明の少年犯罪が頻発した。多くは「現実と虚構の区別がつかない若者たち」と評したが、私は「現実と虚構を区別したうえ、虚構より現実社会を尊重すべき理由が見出せない」のが実態だとし、そうした若者を「脱社会的」と形容した。凶悪犯罪に走るのは極端な例外だとしても、「脱社会的」な感受性をもった若い世代が広汎に拡がっている、というのが今日の状況だ。》

現実が希薄になっていけば、現実社会にとどまる理由はなくなるから、若者たちはますます「脱社会的」な気分覆われていくようになる。このことは、現実が濃密でさえあれば、若者たちはいつでも現実社会にとどまる傾向にあることを物語っている。つまり、現実社会に自分たちを引き止める力を持たないほど、現実が希薄になってしまったのだ。宮台真司のゼミに所属する院生らが、「現実の女の子が濃密な体験を与えてくれるなら現実にも乗り出してもいい」が、そうじゃないから乗り出す気が起こってこない、と反論するのと同じ理由だ。虚構の世界は魅力的だが、現実の世界は魅力的ではないと言い換えることもできるが、この問題は人間が抱え込んでいる幻想量の問題としても捉えられるにすぎない。相手のことを想うという幻想の量が乏しければ、恋愛自体が成立しないのは当然であろう。

モノの豊かさが達成されたポストモダン社会に至って、モノの欠如に喚び込まれてきた幻想量が極度に乏しくなってしまったといえるかもしれない。もちろん、モノが充足される生活のなかで人々は多くの幻想量を放出しなくなっただけでなく、幻想量の多さによるしんどさを人々が厭うようになり、そのしんどさに耐えられなくなっていったことが窺われる。先の院生の反論をもちだしていえば、おそらくこういうことかもしれない。現実の女の子が与えてくれる濃密な体験と、ゲームの世界で味わうことになる濃密さとは、同じ濃密さであっても、一緒にすることはできないし、対比させるには困難が伴う。現実の女の子が与えてくれる濃密な体験には必ず関係の加害性・被害性といった

事態が生じるから、体験が濃密であればあるほど、関係の加害性 - 被害性も深まり、抑鬱感情を双方が抱え込むことになるのは避けられない。

一言でいえば、現実の女の子との付き合いは楽になる分、面倒も多くなるというてよい。しかしながら、ゲームの世界での濃密さには関係の加害性 - 被害性もともと免れているから、女の子との付き合いには煩わしさは伴っていない。院生らに現実と虚構の区別が理解されていない筈がないし、区別したうえで、「現実の女の子が濃密な体験を与えてくれるなら現実にも乗り出してもいい」と言っているとすれば、彼らの言い草はどうしても腑に落ちないのである。なぜなら、現実の女の子が与えてくれる濃密な体験にはゲームの女の子と異なって、煩わしさがびっしりとこびりついているからだ。彼らがその煩わしさを見据えているとはとても思われぬ。濃密な体験の甘美さだけを受け入れようとしているのが感じられる。多くの煩わしさを抱え込んでいるが故に、体験が濃密なものとなっていくことを彼らは知りながら、その煩わしさの中に踏み込んでいく気もない癖に、そう言っているような気がしてならないのだ。

たとえば、《相手の携帯にほかの男からメールが入っていても驚かない》のは、驚くような濃密な付き合いではないからである。メールのことで少しでも文句を言えば、付き合いがなくなることがお互いにわかっているのだ。その程度のことを許容し合わなければ、男女の付き合いは成立しないし、維持できないのである。しかし、相手のことが好きであれば、他の男からのメールが気にならない筈はないし、問い質したくなるに決まっている。だが、その気持は抑えなくてはならない。もしそのことに抑鬱性を感じるのであれば、自分のほうから付き合いを断ってしまうことになるだろう。気になれば、問い質しても問い質さなくても、結局は付き合いは続かなくなってしまうのだ。そんな付き合いでも続けたいと思っているなら、自分が気にならないように訓練する以外にない。だから付き合いはますます薄くなっていく。付き合いしている感覚がなくなってしまうほど、希薄になっていくのである。

他の男からのメールに驚かない振りをしているのではなく、本当に驚かないのかもしれない。相手が他の男とも付き合っているにも本当に驚かないとすれば、それは一対一の付き合いに関係の重さを感じているからだと思われる。重さとはしんどさであり、煩わしさであるが、自分たちの付き合いが一対一の関係にならないように、むしろ他の男とも付き合ってくれているほうが気楽に感じる傾向があるようにもみえる。付き合いしていることが少しでも煩わしくなっていくのが感じられるなら、いつでも付き合いから降りる用意をしている、といったような付き合いかたが若者たちの間に広がっているとすれば、そこに「濃密な体験」が生まれてくる筈がない。付き合いを深めるなかでしか、「濃密な体験」が育まれてこないからだ。もちろん、付き合いを深めるためには、付き合うことでさまざまに生じる煩わしさをお互いに引き受けていく覚悟をもたなくてはならない。

院生らが、「現実の女の子が濃密な体験を与えてくれるなら現実にも乗り出してもいい」と言うとき、その覚悟をもたずに言っていることは確かだ。そこには自分のほうでも、



現実の女の子に「濃密な体験を与え」という発想は全くみられないからである。こう指摘すると、彼らはこう反論するにちがいない。そんな覚悟をもってしてまで付き合いたくなるような魅力的な女の子は現実にはいない、と。自分のほうに覚悟がないのに、相手にだけ覚悟を求めるのは成り立たない。したがって、「現実の女の子が濃密な体験を与えてくれる」というようなことは、けっして起こりえない。ということは、濃密な関係づくりが成立する余地は全く見出されないということだ。であれば、「現実<sup>ひとごと</sup>は実りが薄い」などと人事で済ませるのではなく、現実からの実りを薄くしている責任の一端は自分にもあることを自覚する必要があるだろう。

若者たちがこのことに感づいていない筈はないと考えられる。確かにそうだと思っても、現実の女の子との付き合いにはどうしても腰が引けてしまうし、臆病になってしまうのはどうすることもできないのだろう。どうしても「虚構より現実社会を尊重すべき理由が見出せない」のだ。いくら現実であっても、楽しさよりも嫌なことのほうが多ければ、切羽詰まった余程のことがないかぎり、その現実<sup>ひとごと</sup>にむかって足を踏みだしていくのは非常に困難だろう。ここまできてようやく気づくにちがいない。嫌であろうとなんであろうと、いまの若者たちにはそうしなくてはならないだけの切羽詰まった事情もなければ、背負っている荷物もないということに。大地を踏みしめて歩く感覚からは程遠く、地球の重力からまるで解き放たれているかのような、飛び跳ねている軽さの感覚のなかで、公転のない自転として浮遊しているだけなのだろう。自分自身を繋ぎ止めるものを自分の外にも内にも見出しえなくなっているのだ。

ノンフィクション・ライターの石川結貴が「男たちがメイド喫茶に『萌え』る本当の理由」を求めて、オタクの聖地・秋葉原探訪のルポ（『婦人公論』05・9・7）を行っている。世界的に有名な電気街・秋葉原では「萌え」や「アキバ系」、女性には聞き慣れない言葉で表現される現象が、多くの若者たちに支持される。アニメ、ゲーム、フィギュア（細部までリアルな人形や模型）、同人誌、コスプレなどの専門店が揃い、いわゆるオタクな人々の「聖地」となった感がある。メイド喫茶は、その聖地の中でも一大ブームを巻き起こしているという。その数、十数軒と言われるが、毎月のように新規開店があり、正確な数は把握しにくい。》

メイド喫茶には、いくつかのタイプがあるという。

《客を「ご主人様」と呼ぶタイプ。メイドさんみずから、コーヒーにミルクを入れかき混ぜてくれたり、オムライスの上にケチャップで絵を描いてくれたりする。もちろん、「ご主人様、ミルクをお入れしますか？」などと、「お伺い」を立てた上で、あくまでもご主人様の意思を尊重する、これがメイドさんの心構えだという。

一緒にプリクラを撮ったり、3分500円でゲームを楽しめる店もある。ゲームと言っても、トランプや卓上型のおもちゃを操作する程度。健全で、和気あいあいと楽しむことが、メイドさんと客との間に「友達感覚」を生む。こうした親近感に惹かれて、メイド喫茶にハマる男性も少なくない。》

ポイントカードを発行して、《獲得ポイントに応じてメイドさんから「ささやかなプレゼント」が贈られ》たり、《メイドさんと客との「交換日記」ができる》店もあるという。価格も普通の喫茶店と変わらないが、メイド喫茶の別の一面についてこう記す。

《仕事中のメイドさんを「鑑賞」したり、彼女たちの姿を通して「妄想」するというものだ。その妄想をふくらませるためなのかどうか、メイドさんの中には「わざと」眼帯をしていたり、メガネをかけていたり、包帯を巻く人がいる。

眼帯や包帯から、いったいどんな妄想が広がるのか、私には見当もつかない。それでも、「静かにメイドさんを観賞し、ひとり妄想に耽る」行為こそが、「メイド喫茶本来の楽しみ方」という声もある。》

「誤解してほしくないのは、性的な妄想をしているわけではないということです。むしろ、メイドさんに対して性的なイメージを持つことはタブーなんですから」と語る、「オタク」を公言する25歳の若者によれば、客にとってメイドさんは「自分より価値が高い存在」であり、「アキバ系の人にはピュアで真面目だから、なまなましいセクシーさには距離を置くんです。メイドさんに求めているのは、かわいいとか、健気だとか、夢を見させてくれるという、いわば憧れ。そのメイドさんに、お砂糖を入れてもらったり、気さくに話しかけてもらえたりする。メイドさんが働く姿をチラチラ見て、ちょっとドキマギする。うれしい、恥ずかしい、微笑ましい、そんな感情のミックスを楽しんでいるわけで、言うなればそれが『萌える』ということでしょう」と説く。

メイドさんに生身の女の子を感じ取ってはならず、バーチャルな世界での動くフィギュアのように接する必要があるということかもしれない。メイド喫茶では現実の次元での振る舞いが禁じられているというより、現実の世界ではない仮想の異空間として現出している、そこに客としての役割を演じることができるのがメイド喫茶ということかもしれない。《メイド喫茶に通う男性たちは自分に自信が持てず、自己評価が低い傾向にある》、いわば「モテない男」であり、《女性に対して臆する気持ちを抱きやすい。まして、最近の女性は性格も言動もキツイ。そんな彼女たちに引いてしまい、さらに自信をなくす》という悪循環に陥っているからこそ、《「こんな自分に優しく接してくれるメイドさん」に感動し、大切な存在として静かに「萌え」を楽しんでいる》と、彼はメイド喫茶に通う理由を話す。

「メイド喫茶に通うのはゲームに似て」といえるのであれば、ではそれはどのようなゲームなのか。「最初は緊張して行く。まず店の雰囲気を知り、少しでもメイドさんと仲良くなる。そこで『セーブ』したら、次は前回の続きからはじめられるんです。だんだんとフレンドリーになる喜びは、ゲームをクリアしていく感覚かもしれません」と言う彼に、取材側も《客は、メイドさんが自分に特別よくしてくれると幻想し、次回はどんなふうにも楽しもうかと妄想する。いわば「萌えゲーム」をしていると考えればいいのかも》と納得する。が、そこに関係の濃密さがもたらす煩わしさから逃れようとする、「脱社会的」な気分が漂っているのは明白である。だから、「妄想するのは楽し

いし、それ自体は悪いことじゃない」が、と次のように指摘する、週末に自分の店にも「メイド店員」を置いている42歳の輸入食料品店主の言葉も取り上げている。

「オタクの人は自分の世界に熱いこだわりを持っている。ただ、ときにそれが高じてしまうんです。たとえば、自分の趣味の話を延々として周囲を辟易とさせたり、逆に自分から壁を作ったり。その結果、誤解を招いてオタクではない人とのコミュニケーションがむずかしくなります。現実の女性よりアニメやマンガといった架空の女性のほうが楽、生身の人間関係で傷つくより妄想の世界で楽しみたい、となるのでしょう」

ここでもう一度、「現実の性愛には実りがない」から、濃密なゲームの世界へ足は向くのだ、と宮台真司に反論した院生らの言い草を持ち出して、一体なにが問題なのかを考えてみる。「現実の性愛には実りがない」だけでなく、煩わしさのみ多かりき、といった気分は充分共有できる。しかし、だからといってゲームの世界には実りがあるかといえば、あるとはけっして思われない。「メイド喫茶」に通って一体、どんな実りがあるというのだろう。なんだかんだ言っても、結局のところ、「生身の人間関係で傷つくより妄想の世界で楽しみたい」ということだろう。妄想の世界ではなによりも傷つかないからだ。どうして傷つくことをそんなに恐れるのか。どんどん傷つけばいいではないか。生きるということは現実から絶え間なく傷つけられることなのだから。

もちろん、この声が若者たちに届くとは思われない。取材者が《健気なバーチャル世界で萌えるより、厳しい現実社会と格闘》せよ、と繰りだすような声はうんざりするほど聞かされているにちがいない。「現実の女の子が濃密な体験を与えてくれるなら現実に乗り出してもいい」と院生らが言うように、彼らが濃密な体験に憧れていることは間違いない。ただ憧れるだけで自発的に行動しようとはしないのだ。受動的であって全く能動的ではない。しかし、若者というのは能動的にみえて、その実受動的であるのは昔も今も同じである。違うのは時代の勢いだ。現実には受動的な若者を巻き込み、前へ押しだしていくだけの熱気と力があつた。関係には有無を言わさぬ強引さがあつた。傷つくなどと感傷に耽る間もなかった。自分を巻き込む関係から逃れようとしても、自分からはどこまでも逃れられないことをどこかで感じ取っていた。

濃密な体験に触れるためには、関係から逃げないことだ。逃げられるから逃げるのではなく、自分から自分を逃げないようにしなければならない。つまり、自分が自分に対して濃密であるように仕向けなければならない。自分が自分に対して濃密でないのに、どうして「現実の女の子が濃密な体験を与えてくれる」ということが起こりうるだろう。現実があまりにも希薄だから、濃密な体験が得られないのではない。自分が自分に対してあまりにも希薄で、自分を強く突き放すことができないから、自分がかかわるところではどこでも濃密な体験ではなくなってしまう、そのように思われる。自分が自分の中に逃げ込もうとするのではなく、逃げ込むことのできない自分を確立する途上でしか、自分を相手とする濃密な関係はつくりだせないだろう。希薄な自分は希薄な現実のなかでしか生きられないとずっと思い込んでいるからだ。

2006年3月30日記

